

「死線を越えて」点訳本完成

上巻 2年かけ996枚、ファイル6冊

芦屋の団体

芦屋市で活動する点訳グループ「はまなす点訳グループ」（谷脇清助代表）が、神戸市出身の社会運動家でノーベル平和賞と文学賞の候補にもなった、賀川豊彦（1888～1960）の著書「死線を越えて」の上中下巻の点訳に取り組んでいる。「貧困や格差という現代にも通じる問題に取り組んだ賀川の功績を目の不自由な人にも伝えたい」と、企画から約2年の今年7月に上巻が完成。賀川記念館（神戸市中央区）に寄贈され、今月から視覚障害者に貸し出されている。

【米山淳】

賀川豊彦の功績「目の不自由な人にも」

同グループは92年、現在定年退職した男性や主婦ら約10人が毎月、コープこうべの情報誌を点訳している。社会運動や農民運動など幅広く活躍した賀川は1909年12月、神戸のスラム街に住み、貧民救済を始めたことでも知られる。20

同グループは92年、「夫の遺品の点訳板で点訳したい」という女性の呼びかけに賛同したメンバーで活動を開始した。最初は、知識も経験もなく見よう見まねで点訳していたが、15年ほど前からパソコンソフトを活用。

メンバーは毎月2回の集まりに点訳したデータを持ち寄り、互いにチェックした。細心の注意を払っていたが、点訳ミスも多かったという。谷脇さんは「点訳より点検のほうが苦労した」と振り返る。



「死線を越えて」上巻の点訳本を完成させた「はまなす点訳グループ」のメンバー＝芦屋市で

記念館で貸し出しも

年に出版した「死線を越えて」はこうした体験を綴った自伝的小説で、当時のベストセラーとなった。

同グループは賀川が神戸で活動を始めてから100年に当たる09年、代表作の点訳本を企画した。点字は6点の穴の組み合わせで50音を表現する。専用ソフトを使って、460字ある原作を分担し点訳。芦屋市の富久ちづ子さん(62)は「最近では使われないように文節を区切ることに気をつけた」と

「完成した作品を手にする」とまたやろうという気持ちになった」と話すのは同市の福井香代子さん(67)。間もなく中巻の点訳作業に取りかかる予定で、メンバー全員が「時間がかかっても最後まで完成させたい」と意気込んでいる。